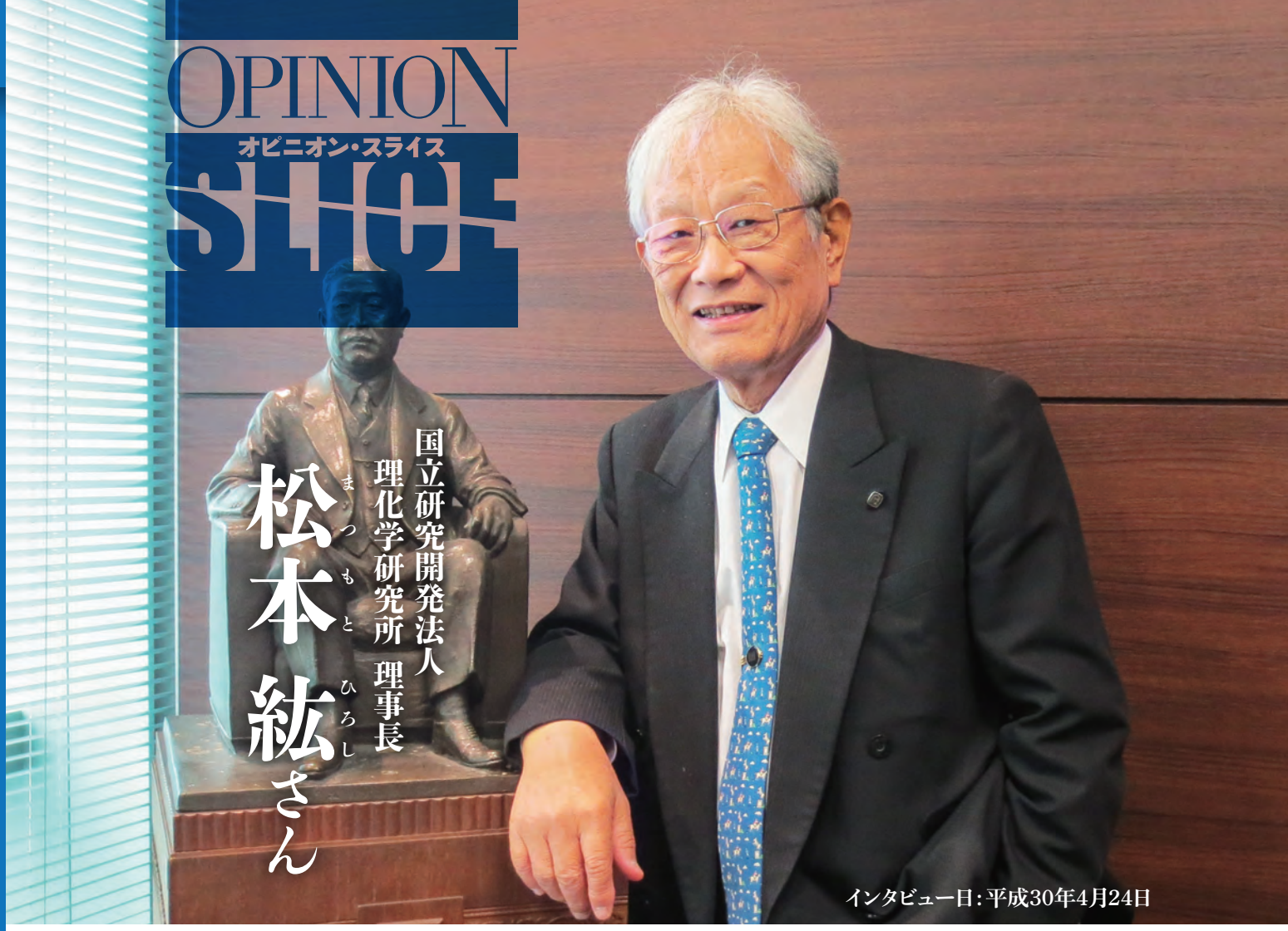
OPINION
オピニオン・スライス
SLICE



国立研究開発法人
理化学研究所 理事長
松本 紘（まつもと ひろし）さん

インタビュー日：平成30年4月24日

幼少時代と家族の思い出

おやじは農家の次男坊で、あまり教育を受ける機会がなくて、会社に就職するときも最初は工員で入っています。銅を溶かす溶銅工。銅の塊を担いで、溶鋼炉に入れる役ですね。

ただ、勉強家だったので、それで終わらず、会社では労働組合に入って、書記長かなにかをやって、その後、社員教育の課長に取り上げてもらったようです。当時、学歴のわりにはいいポジションにつけてもらって、喜んで家に沢山の本を持ち帰っていましたね。

家族全体では、祖父が祖母と離婚して、残された祖母と母親と私とおやじと弟の５人が住むところが無くなって、おやじの出身の家の納屋を借りて、４畳半で１年ぐらい暮らしていましたかね。幼稚園に私が入るというので郡山に出てきて、祖母の知り合いの家の離れを借りました。6畳一間で、以前の1.5倍になったんですけど、ただ、小学生の高学年になってくると、さすがに狭いので新しい家を探したところ、母親の親戚で、小屋があいているから、それを自分たちで改造するんやったら貸してもいいよと言われて、そちらに移って、そこからずっとそこにいたんですね。

そういう環境の中に育つと、顔を見るのは両親、家族、友達、あと学校の先生以外はないんですよ。濃密な家族関係でした。私も弟も、大人になって京大の教員になりましたが、小学校時代はそんなこと、もちろん知るわけもありません。兄弟で２歳違いなんですが兄弟げんかにはうってつけで、弟も僕も負けたくないし、棒切れを持って殴り合いをしたり、石を持って投げ合ったり。弟は弟の子分がいますし、私は私の仲間がいますから、別々に行動しているんですけど、家へ帰るとチャンバラになると。そんな生活でしたね。

届けたい。弁護士の力
大阪弁護士会 総合法律相談センター TEL 06-6364-1248

青年時代

高校は、地元では奈良県立の郡山小、郡山中、郡山高校というコースがありましたが、中学で就職する子も１割ほどいましたから、経済的事情から、下手したらそうなるかなと思っていました。ただ、成績はずっと１番で、中学校の先生が調べてくれて、国立の高校（注:現在の奈良女子大附属中等教育学校）が、授業料と入学金も免除してくれるということが分かり、進学しました。

中学からの持ち上がりで高校に進学する子も大勢いましたので、外様と譜代が分かれるような高校でしたけど、それなりの連帯感があって、譜代の子は譜代の子でずっと仲もよく、楽しかった高校時代でした。人生で一番楽しかった時期ですね。

大学は経済的に関東に出るお金はなかったし、家から比較的近かった京大の電子工学を受けました。調べてみたら、電子工学が一番難しかったんですね。どうせ受けるんやったらそこを受けようかというところです。電子工学に興味があったわけではない。花形の工学やったら、就職に間違いなかろうなという程度でした。

研究者の道へ

学生時代、研究者になりたいという気持ちはなくて、勉強も、試験の前の日しかやらない。あとアルバイト。本当は日立に行こうと思って、日立は当時、僕の目に届く範囲の中で一番大きな会社だったので、そこに行って社長でも目指そうかと。サラリーマン人生を過ごして、運がよければ社長になって、という子供みたいな夢を持っていたんですよね。

大学院というのは一応試験があるんですけど、トップ３人か４人か忘れましたけど、試験なしで入れる制度があったんですよ。試験なしで君は行けるよと言われて、試験もない、奨学金もくれる、あと２年遊べると。そういう短絡で、大学院に行ったんですよ。

ただ、大学院に行くと、研究テーマが与えられる。学部のときはモンテカルロ法で数学の問題を与えられて、そんなに難しくもなくて、ああ、何や研究というのはこんなもんかと思いました。これ以上やってもしょうがないなという気が半分、研究というのはこんな程度やったら、僕でもできるかなと思ったのが半分。それで大学院に行ってみたら、急に世界が開けました。そこで初めて、世の中が見えたんですね。

恩師との出会い

やっぱり結局、それぞれの人々が、どういう人にどの時期に会うかということで、人生の大半が決まると思うんですけど、私の場合はそういう意味で運がよかったんですね。いい恩師に、恩師群と言ったほうがいいですけど、優秀な先生方にお会いできたということと、哲学を語るような先生がいたんですね。

たまたま入った研究室では、すごく世界的にも有名な学者なのに、どうみても工事現場の親方みたいな感じの大林先生に、個人授業みたいなことをしてもらいましたかね。毎週水曜日に残されて、分厚い論文を渡されて、来週までに読んでこいと言われて、今考えてみたら、自分で読むのが面倒くさいから、学生に読ませたんだと思いますけど、一応そのときに論文の内容を報告した後、よっしゃわかった、ちょっと飲みに行こうかというので、先斗町によく連れてもらいましたけど、そのときに、世の中はこうなっていて、今、学問の世界でこうなっていて、世の中には頭のいいやつはごまんとおると。でも、頭のよさだけでは学会というのは渡り切れんと。世の中というのは、頭がよくなくてもすごくえらくなる人もいるし、頭がよくてもだめなやつもおると。それは何だと思うといって、そんな話を飲み席でずっとしてもらったんですね。

京都大学副総長時代に出会ったiPS細胞の発明

山中さんの研究のように、全ての生命に対して応用がきくような、あるいはひょっとしたら常識を覆すような研究というのは、基礎医学の分野なんですね。その分野でも、とりわけ常識ではないようなことをチャレンジしてみてやるということに、僕は何となく興味を持っていたんです。そのときに山中さんの研究室の話を見聞きして、ああ、おもしろそうだ

なと思ったんですね。説明もご本人がちゃんとしてくれたし、ああ、すごい好青年だなと思いました。その次の年に、動物ではなくヒトでiPS細胞ができて、これは伸びる、もう行くなと思いましたね。

ただ応援しようというときには、平等主義、民主主義というか、そういうプロセスが求められることが大学には多かったんですけど、あまりにもそれが重視されると応援の成果は上がらない訳です。いいと思ったものに投資をするとなれば、誰かの責任でやらないとできない。本来は総長の責任です。そこで当時の総長に、これいいですよ、やりますよ、と言ったら、ああ、君の好きなようにしたまえという話だったので、じゃ、私が全部責任とりますから、総長には責任が及ばないようにしますからやりますと言って、iPS細胞研究センターをつくったんですね。そのときも色々と反対意見が出ました。改革の提案は誰でもやるんですが実行しないんですよ。実行すると、自分に矢が飛んでくる。僕は改革は実行と思っていたので、iPSに関してはまずやろうと思ってやり始めました。

結果としては、難しい問題が幾つかありましたけど、たくさんの方々の努力をもって、前へ行ったんですね。

京都大学総長に就任して

総長の任期は6年ですけど、最後の1年はレームダックになることもはっきりしていますから、組織としては。5年間で何をやり切るかということを考えないといけません。一生懸命やっても、1つの改革に大体2年かかります。できることは、大きなものは5つ、6つだろうなと思いました。提案した人ができるわけじゃないんですよ。責任をとる人がいないといけない。当然反対は予想されているわけですね。

初めは教養教育の改革がありました。教養の先生がまず反対する。大体1個の議案を出して、全部の教授会から答えが返ってくるのは最低3カ月かかるんですよ。その3カ月たってから意見を聞いてもう一遍やったら、次3カ月かかるわけで、年に4回ぐらいしか大きな議決はできない。重要な問題は、4回ぐらいの議論では、収れんしませんよね。何度も話し合いました。私は、どんなことを言われようとやるつもりでいたんですけど、そういう姿勢を見せていると、やっぱりその方向へだんだんと賛成者が増えていきますね。繰り返し議論してもらって、ゴーしました。

理化学研究所(理研)の理事長に就任して

理研の理事長に就任するにあたり、日本国の置かれた状況からすると、理研の果たすべき使命は本当に重要なものであり、このことを世の中に知らせていかなければならないと思いました。

一方で、組織の中のガバナンスについての問題が指摘されていましたので、これに対応しました。何か起こったときに処理するには、ガバナンスの系統的なシステムをつくっておかないとできないですね。これは着任した2015年からこれまでの3年間で、大体のめどがついたと思って

います。

さらに、世界の中のランキングを上げようと思っています。今、世界の研究機関の中で理研の評価ランキングは、10位か11位、その辺をうろうろしていますが、日本の大学はそれに対して70位とか100位近いところに落ち込んでしまっています。ただ、理研だけが上がるということは、不可能だと思っているんですね。大学の優秀な人たちと手を取り合って、理研と一緒にやろうじゃないかと声をかけ、科学技術ハブ構想をもって、日本の科学技術全体の底上げをしていく責任が理研にはあると思っています。

理研が長期的に目指すべき方向性について

1番目には、社会の中で肩を並べるような優秀な研究者と競い合って、日本国の存在感を高めていく、2番目には、日本を超えて、世界の学術に対して理研の何人かが歴史に名の残るような貢献をできるような環境を維持、発展させる、この2つだと思っています。

理研の特に素晴らしい点は4つあります。1つ目は、学部間の壁がないこと。物理屋と化学屋、生命科学者、数学者すら仲がいい。一緒に日常的に議論できるんですよ。大学は学部間の壁があって結構大変なんです。

2つ目は、研究者の自由は真の意味で理研のほうが保障されていること。自分の元々の研究分野を越えて色々とできる。1つの単位が大きいんですよ。大学だと、教授、准教授、助教となりますが、理研では大きいと100人単位、少ないと10数人単位。数十人単位で1つの研究をやっています。研究が大がかりになっている現代社会においては、圧倒的に有利なんですね。

3つ目が、例えばスーパーコンピュータを作ったり、SPring-8といった大型放射光施設を作ってタンパクの構造を解析するというようなことは、大学ではできません。理研の研究室単体でもできません。理研全体で、研究者がアイデアを出し合って、超大型で世界の最先端を競うような装置が作れる。これは、大学にはない環境です。

4つ目は、研究者と事務職員の壁がない。もしくは非常に低い。大学の場合は、この壁が結構あるんです。それぞれの専門で、お互いに敬意を持って接するような組織にしないといけない。理研に来たらそれがあるんですよ。

遺伝子操作やAIなどの先端科学技術と法律・倫理の関係について

科学分野と、思想分野、あるいは宗教、社会科学などの分野が分離してしまった。科学そのものが細分化されて、非常に細かい専門家がいるわけですね。その結果、科学全体を語る人は減りました。弁護士でもおそらく、何の弁護士、何の弁護士とそれぞれ分かれていっているでしょう。総合的に議論ができる人が欠落していっているんですね。その視点が今後ものすごい必要で、その枠組みの中で、AIや、遺伝子操作を見るということにしていかないと、そこだけの問題を解決しても、モグラたたきになるだけだと、私は思っているんですね。理研だってAIの中で、倫理チーム、哲学チーム、社会科学チームをつくっています。人間というのは何か。なぜ人間だけが高等な思想を持てるのかという問題が、生命科学のほうの一番根源にかかわるところで、そこにまだ解明のメスが入っていない以上、考えられるいろんな手段で、両者の融合を図らないといけない。お互いに疑わずに話をする。これがなかなか難しいんですよ。科学者に対して、宗教家が何か言うと、そんなものは非科学的で、迷信やろと。一方、こちらは科学のことは難しいから勉強できないというて、ちょっと敬遠しはるのね。その態度がよくなくて、それを助長するような教育が今、行われていますよね。あなたは文系よと。あなたは理系よと。とんでもない話だと、僕は思っているんです。これからの人間の文明が進むためには、両者ががっちりと組める、少なくとも組むことができる要素を持った人たちを育てる、総合文化人みたいな人を育てるということが今後の大きな課題だと思っています。

弁護士への期待

弁護士というのは、法的知識人として、先ほど言った総合文化人に近い立場におられる集団じゃないかと思います。科学者の一部もそうなんですけどね。そういう人たちが一緒になってやっていくことが、私が弁護士の方々に最も期待するところですね。

（インタビュアー：副会長 藤川義人）